富木謙治の武道技術論の出発点と戦前における展開： 嘉納治五郎の「武術としての柔道」論の継承を中心として

工藤 龍太

Ryuta Kudo: The inception and development of Kenji Tomiki's technical theory of budo during the pre-war Showa era, with reference to the succession of Jigoro Kano's concept of judo as a martial art. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci. 61: 681-700, December, 2016

Abstract : The present study aimed to clarify the inception and development of Kenji Tomiki's technical theory of budo during the pre-war Showa era, focusing particularly on the succession of Jigoro Kano's concept of judo as a martial art. The main points are summarized as follows:

A letter written by Tomiki in 1928 reveals that he was interested in the comprehensive combat techniques of Ueshiba's aikijujutsu including the use of bare hands and weapons. Tomiki considered that devotees of budo should practice a comprehensive range of techniques from bare-handed combat to the use of weapons. While he mainly succeeded to shobu (martial arts) under the systematic judo theory of Kano, he also thought it possible to overcome the problems inherent to taiiku (physical education), shushin (development of the spirit), and ishinho (methods to ease the spirit) by studying aikijujutsu. The starting point of Tomiki's theory was to emphasize the kata training that simulated various situations in actual combat.

During the prewar period, Tomiki tried to ascertain the fundamental principles of ken-no-ki (ki of the Japanese sword) and ju-no-ri (the principle of flexibility). These principles made it possible to complement the principle of judo as seiryoku-zenyo (most efficient use of energy) that Kano had proposed technically.

In 1942, Tomiki published a research article entitled "The systematic study of techniques while maintaining distance in judo: The principles of judo and the techniques of Aiki-Budo". In the article, he tried to present consistency between randori and these techniques while maintaining distance in judo, then established 6 fundamental laws of martial arts, including kendo, a system for education in these techniques, and the 12 basic kata.

The consistent points of Tomiki's theory of budo in the pre-war era were to understand the strong and weak points of each competitive budo and kata, and the importance of kata. Although the emphasis on atemi-waza in Tomiki's theory had points in common with the combative techniques of school budo during the interwar period, Tomiki was really interested in overcoming the disadvantages of judo for sport based on Kano's concept of judo as a martial art. Tomiki mainly inherited the latter, and criticized competitive judo.

Key words : aikijujutsu, criticism of competitive budo, kata training, school budo

キーワード : 合気柔術, 武道の競技化批判, 形稽古, 学校武道

I はじめに

武道は日本伝来の武技の修練による運動文化であり、現在は柔道、剣道、空手道などを総称する概念として一般的に用いられている（日本武道協議会，2014）。したがって、武道についての理論を意味する「武道論」も各種目横断的な理論であるべきだが、現在の武道研究は各種武道種目の研究へと分散化しているのが現状である。このような状況をふまえ、これまで提示されてきた武道論を再検討することは重要な課題である。

近代以降の日本において武道を種目にとらわれず統合的に論じた人物の1人として、講道館柔道創始者である嘉納治五郎（1860—1938，以下「嘉納」と略す）が挙げられる。嘉納自身が「本来からいへば、槍でも、薙刀でも、その他何でも攻撃防禦の目的に適ふものは柔道の内に包含される」（嘉納，1918，p. 5）と述べていることから明らかなように、嘉納の武術としての柔道論の技術的側面は、襟袖に組み付いて行う競技柔道に留まらない間口の大きなものであった。つまり、嘉納の武術としての柔道論は、種目横断的な武道技術論を有していたのである。しかし、これまでの先行研究では嘉納の武術としての柔道論が、嘉納以後どのように継承され、展開していったかという問題は論じられなかった^{注1)}。嘉納の柔道論の継承を扱った永木（2008a）も、考察対象が起点となる嘉納から一気に戦後へと移っており、嘉納の武術としての柔道論の戦前における詳細な展開については未解明のままである。

こうした現状をふまえ、本研究では、柔道を中心に合気道、剣道など多くの武道を研究した富木謙治（1900—1979，以下「富木」と略す）に着目する。富木は柔道創始者である嘉納と合気道創始者である植芝盛平（1883—1969，以下「植芝」と略す）の2人の武道家に師事し、独自の武道技術論を構築した人物である。本論文で詳述するが、富木は当時の柔道が抱えた問題点を体系的に批判し、それを克服するために植芝の武術を熱心に修行し、嘉納の武術としての柔道論を発展させ

た武道技術論を構築した。2012年度から中学校の体育において武道が必修化されたにもかかわらず、武道に一貫する技術理論が提示される機運がみられない今日にも、柔道、合気道、剣道と複数の種目を横断的に研究し、その成果を一元的に統合した富木の武道技術論を再考することは意義あるものと考えられる。

これまで富木は、合気道史において、嘉納の柔道論の影響を受けて合気道の競技化を試みた人物としてのみ評価されることが多かった。合気道には合気会を中心にいくつかの会派が存在するが、ほとんどがあらかじめ決められた動作を繰り返す形稽古のみを練習体系の中心にしておき、柔道のように互いの自由意思に基づいて行われる競技形式の乱取り稽古は採られていない。志々田は、戦後に富木が早稲田大学で教鞭を執りながら合気道競技を構想する過程を解明しているが（志々田，2001），戦前の資料を用いて富木の武道技術論の出発点や展開過程を調査した先行研究は見当たらない。

合気道創始者である植芝盛平の子息であり、植芝の組織である合気会の二代道主も務めた植芝吉祥丸（1921—1999）は、富木の合気道の競技化の構想を否定し、合気道（合気会）において試合（競技）を採用しないことを主張している（植芝，1995，p. 188）^{注2)}。また、富木が教授を務めた満洲国の建国大学の生徒であり、後に合気会の師範も務めた奥村繁信（1922—2008）は、競技化を志向した富木に対する植芝の反対もふまえ、オリンピック種目となった柔道を例にしながら、武道における競技化を精神性の消滅として批判する（合気ニュース編，2006b，p. 12）。こうした評価は、富木が生涯をかけて構築した武道論について理解が及んでいないため、また特にその理論的出発点が不明確なまま、「富木は合気道の競技化を志向した存在」と受け止められていることを示している。

一方、師である嘉納が希求しつつもその存命中には成し遂げられなかった、「武術としての柔道」はどうあるべきかという問題を継承してその解明を試みた人物が富木であると位置付ける先行研究

もなされている。嘉納が1889（明治22）年の講演で、柔術を「無手或は短き武器を持って無手或は武器を持って居る敵を攻撃し又は防禦するの術」（嘉納，1889，p. 447）と定義したことからも明らかなように、嘉納は柔術が徒手の技術を基本として総合的な技術を包含していることを理解して、武術性を喪失しないよう配慮しつつ、近代に適合する身体運動文化として柔道を創始した。また、柔道の稽古方法として形と乱取りを採用し、バランスの取れた形と乱取りの稽古により「武術と体育」を達成しなければならないと嘉納（1930a, 1930b, 1930c, 1930d, 1930e, 1937）は修行者に説いている。志々田（1979）、Shishida（2010, 2011, 2012）は、嘉納が武術としての柔道を志向した結果多くの武術を研究したこと、弟子の富木がその問題を引き継ぎ、離れた間合からの柔道を研究したこと、その答えとして嘉納が構想した「柔道原理」と「剣道原理」をより具体的に定義したことを明らかにしている。志々田の一連の先行研究は、嘉納から富木へと至る系譜の中で、武術としての柔道という視点で富木の武道技術論の内容を明確にしたものである。しかし、先述した富木の武道技術論の出発点がどこにあるのか、また当時の柔道競技や学校体育との関係も含めて嘉納の武術としての柔道論をどのように発展させ、独自の武道技術論を構築していったのかという問題には言及していない。

以上をふまえ、本研究では今日の合気道の基盤が形成される時期（1928—1940年、工藤・志々田，2010，p. 454）に植芝に入門し、講道館柔道と合気道を比較研究した富木の武道技術論の出発点と戦前における展開を明らかにする。具体的には、富木が嘉納の武術としての柔道論をどのように継承し、植芝の技法のどの点に関心を持ち、どのように稽古すべきと考えたのか、同時代の柔道競技や学校武道との関連もふまえながら富木の武道技術論の戦前における展開過程と独自性を考察する。考察の範囲は、富木の武道技術論の萌芽とみなすことが可能な史料の初出と考えられる1928年から、1942年に満洲国で富木が刊行した研究論文『柔道に於ける離隔態勢の技の体系的研

究』（以下『離隔態勢の技』と略す）までとする。そこを1つの区切りとしたのは、志々田が指摘したように、上記論文が「嘉納が生涯をかけて追求した課題への一つの解答」（志々田，1979，p. 49）であり、富木の武道技術論の形成の1つの区切りとみなすことができるからである。

なお、史料の引用に際しては旧字体を新字体に、片仮名は平仮名に改めた。また、本研究における「武術」と「武道」の概念は、今日一般的に用いられる武の技術を意味する武術と、各種の武術種目の総称である武道として使い分けた。

II 富木の武道技術論の出発点

幼少の頃から柔道に親しんだ富木は、早稲田大学柔道部に所属し、足技の名手として当時は稀少であった学生の柔道四段となる（佐藤・志々田，2008，pp. 12-13）。同時に、東京学生柔道連合会の委員としてしばしば嘉納を訪問し、その聲咳に接する。一方、1926（大正15）年の秋に友人の紹介で、富木は武術の達人と評判の植芝を訪ねる。柔道にはみられない植芝の技法に感銘を受けた富木は、植芝に入門し熱心に稽古に励む（富木著・志々田編・解説，1991，p. 272）。

1. 富木筆（1928）竹下勇宛書簡について

ここでは、1928（昭和3）年に富木が植芝に入門して2年後に海軍大将であった竹下勇（1869—1949，以下「竹下」と略す）に宛てた書簡（図1）^{註3）}から、講道館柔道と合気柔術を比較した富木による、当時の柔道に対する体系的な批判を明らかにし、富木が嘉納の武術としての柔道論をどのように継承し、植芝の技法のどの点に関心を持ち、どのように稽古すべきと考えたのか、富木の武道技術論の出発点を明らかにする。この書簡は私信であり、本研究で後に用いる富木の各種論考とは客観性などの点で性格が異なり必ずしも同列には用いられない。しかし、富木が同年5月に小説家・中里介山に宛てた書簡にも同内容の記述が確認でき（柞木田，1979，pp. 207-211）、これらの書簡に記された内容を富木の武道技術論

図1 富木謙治筆（1928）竹下勇宛書簡

の出発点とみなすことが可能である。本研究では一次史料であること、富木が植芝という共通の師を持つ竹下に対して、植芝の武術への率直な印象を語っていると判断し、竹下宛書簡を使用した。

植芝への入門時期は、竹下が1925（大正14）年12月、富木が1926（大正15）年秋と近い。当時軍事参議官であった竹下（黒沢，1998，pp. 64-72）と早稲田大学の学生であった富木の間には年齢、身分共に差があったが、竹下の日記^{注4}には富木の名が散見される。例えば1927（昭和2）年9月28日には「夜富木氏来訪」とあり、同年11月14日には「午前、節を伴ひ柔術稽古に赴く、下条、山本、山路、富木氏来場。」等と交流があったことがわかる。1928年1月18日は、「午前柔術稽古。富木氏入営に付き本日限り稽古を止む」と、この時点まで富木が竹下と稽古を継続していたことが記されている。同年9月21日には、「午后柔術稽古 弘前富木氏より合気柔術に関する意見来る 講道館柔道との比較面白し」とあり、本研究で扱う書簡を指していると考えられる。したがって、兄弟子である竹下へ宛てた富木の書簡は、植芝の武術に対する富木の率直な意見と共に、富木の武道論の出発点を考察できる史料とみなすことができる。以下では関係箇所を引用するが、句読点は適宜筆者が補った。また、書簡で引用する「先生」とは植芝を、植芝の「柔術」とは合気柔術のことをそれぞれ指す^{注5}。

まず冒頭の時候の挨拶の後、植芝の合気柔術を修行して率直な感想が述べられる。そこには、植

芝の指導が短期間であったにもかかわらず「非常に有意義ある月日」だったとしたうえで、「小学校時代より十数年間も研究」していた富木の「柔道観に非常な革命」が起きたとあり、植芝の合気柔術がいかに富木にとって印象の強いものであったかが窺える。同時に、「これ迄柔道に対する疑問之点或は不満の点に関して多々教へられもし、悟らしても貰ひました」とあり、当時の「講道館柔道の立場なども明瞭に」なったとある。では富木が当時の柔道に対して抱いた疑問や不満、柔道の立場とは何か。

- ・ 一つの道としての柔道は大きい意味の武道に包含せられるものではないか、然らば殊更に柔道として立論するの要ないやうであります。
- ・ 武道といふ一つの一貫した道あり、この道この心理が現はるる形式によって剣術ともなり、槍術ともなり…武芸十八般ともなるのであります。故に総ての武術は結局唯一つの武の道の現れであります。従って剣術も柔術も…剣道、柔道と分けて説く必要がない事になります。
- ・ 進退、行動、体姿、呼吸、皆諸芸相一致するところがなければなりません。然るに今の柔剣道の如きは殆ど益々懸隔しつつあります。柔道の如きは何等武器を持たずして行ふものでありますが、此等諸芸の基本ともならなければなりません。

道としての柔道が、柔道や剣道など種目の総称としての武道概念に包含されるのであれば、わざわざ柔道や剣道等と分けて立論する必要がないのではないか、というのが富木の疑問である。それに対し、植芝の合気「柔術」によって全ての武術が1つの道に帰一するということが明確になったという。そのため、進退、行動、姿勢、呼吸など全てが一致した原理で行われなければならないというのである。特に、柔道は無手で行う「武道」であるのだから、あらゆる武術の基本とならなければならないという。つまり、師である嘉納

の柔道の構想と同様に、富木にとっての武術の基本は無手術であったことがわかる。

この点について、工藤は1930（昭和5）年頃の植芝の武術技法が徒手対徒手の技術だけでなく、武器を用いた技術も含まれた、武術的に総合的な性格を持っていたことを明らかにした（工藤，2015a, p. 156, p. 162）。富木が指摘したのは、襟袖に組み付く格闘形態のみで展開される柔道の乱取り稽古にはみられない、こうした合気柔術の技術的総合性にあったと考えられる。

書簡では富木にとって理想の武道の姿が述べられている。それは「その道の進むと共にその術に於いても並行して進む」、「老境に到り精神的鍛錬の進むと共に益々術の冴えを来す」とあるように、修行の進展と共に、技術も深化するもので、それが競技スポーツと異なる点だと富木は説く。剣道は「六十以上にして尚壮者を凌ぐ気合」があり、より「武術の理想に合致」しているという。一方、「この理想に照らせば現在講道館柔道は疑問の点が頗る多い」というのである。つまり、「青年時代の数年間」しか強さを維持できないという、現代の競技化した武道にも通じ得る問題である。植芝の合気柔術は、そうした富木の疑問を解消したというが、それは具体的にどのようにして実現できるのかは、この書簡ではまだ述べられていない。

- ・ 講道館流は極限られた範囲の発達しか望まれぬやうに思われます。
- ・ 近時拳闘、唐手術等の輸入につれその権威を損はれ、実際現在に於ては行詰りを感じてゐるやうにも思われます。

ここで、上述した当時の柔道の立場が明確に示される。柔道には「極限られた範囲の発達しか望まれ」ず、しかも「拳闘、唐手術等の輸入」の結果、柔道の権威が損なわれ、行き詰まっていると富木はいう。では、富木の述べる柔道の権威と行き詰まりとは何か。上記引用の後に柔術の起源や嘉納が創始した柔道の由来が説かれるが、古流柔術は「真剣勝負」、「攻撃防御」を主な目的として

いた結果、「逆業」、つまり危険な関節技や「当身」技が最も多く、嘉納が安全性の観点からそれらを除外して柔道を創始したと述べられる。そして時代の状況に合うよう工夫をこらして「種々の勝負法を設け興味本位に為した」結果、柔道は大いに隆盛したが、「今や完全なスポーツとなって了った」のだという。つまり、柔道の権威とは古流柔術が持っていた真剣勝負の技術にあり、スポーツ化した結果それらが消失してしまったことを富木は行き詰まりと批判しているのである。

2. 富木による嘉納の武術としての柔道論の継承

さらに、富木は柔道の修行上の利点と欠点について以下のように述べている。

一、講道館柔道修行上の利益を通常左の四点より説いて居ります。

1. 体育法
2. 修心法
3. 慰心法
4. 護身法

此等の事項を植芝先生の柔術と対比して見ましたら次のやうな事になろうと思います。

ここで富木は、植芝の合気柔術と比較しながら柔道を体系的に批判している。嘉納の柔道体系論は、1889（明治22）年の「柔道一班並二其教育上ノ価値」講演で示された、柔道体育法・柔道勝負法・柔道修心法の3点で構成されている^{注6)}。富木が説く4番目の護身法は、柔道勝負法を指すと考えられる。

また、3番目の慰心法は、柔術が1911（明治44）年に剣術と共に正課に採用を果たした後、嘉納が新たに説いた柔道の体系の1つである。嘉納は1913（大正2）年の「柔道概説」において、「柔道は柔の理を応用して対手を制御する術を練習し、又其理論を講究するものにして、…娯楽を享受することよりいふときは慰心法」（嘉納，1913, p. 1）となると述べ、柔道の娯楽面における価値を説いた。同時に、「人が他の人と筋肉を

使用して勝負を決する如きは更に大なる快樂のこれに伴ふこと論を俟たざるなり」と単純な競技形態の運動による快樂の存在から、「名人の試合及起倒流扱心流の形、講道館五（イツツ）の形、柔（ジウ）の形の如きものに至りては、真に勝負の形たる性質を離れ自ら美的情操を起さしむるものにして、其の見る者に快樂を感じしむるや大なり」（嘉納，1913，pp. 8-9）と述べているように、柔道修行の様々なレベルにおいて慰心法が存在することを嘉納は主張した。桐生によれば、慰心法は1915（大正4）年までの嘉納の論説にみられ、慰心法の名称はその後用いられなくなるものの、「その内容は柔道奨励の一手段として位置づけられていった」（桐生，2010，p. 35）という。この指摘をふまえると、嘉納が論説で最後に「慰心法」を用いたとされる1915年当時に富木はまだ15歳であり、それをそのまま1928年まで記憶していたかは疑問である。それよりは、嘉納は1915年以後も慰心法を柔道の体系の1つとみなしており、その教えを受けた富木がそれを理解、継承したと考えるのが妥当であろう。

以下では当時の柔道に対する富木の体系的批判の具体的内容をみていきたい。まず柔道体育法は、嘉納が「筋肉を適当に発達させること、身体を壮健にすること、力を強うすること、身体四肢の働きを自在にすること等」（嘉納，1889，p. 458）と定義したものである。

1. 小学生・中学生・生徒其他競技として一般にやっては慥に弊害もあり危険でもあります、指導者よろしきを得、適當の注意を以てしたならば、講道館流の不適當とする老人女子にも適するが故に、その範囲の点に於ても又運動として柔道の如く過激に陥り易からざる点に於ても決して劣るものではないと信じます。

植芝の合気柔術は小学生や中学生といった若年層にとって、また競技として行つては危険が伴うものであるものの、適當な指導者によって相應の注意を払えば、柔道の運動が過激に陥り易いため老人や女性にも不適當であるのに対し、合気柔術

は適當な教材となり得ると富木は説く。嘉納は、柔道体育法がかつての柔術と同じように「形と乱捕」によって練習されるものの、「一樣に全体の筋肉を働かせ」、かつ「怪我の恐れが無い」ように工夫を施していることを説いている（嘉納，1889，pp. 458-459）が、富木からすればそれでもまだ体育としては対象者や内容の面で不適當なものであったとみなされていたことがわかる。これは、嘉納が乱取りと形によって体育法を編成したものの、実際は乱取りが中心となって柔道が普及していったことが関係していよう（井上，2004，pp. 53-54）。

次に柔道修心法である。修心法は嘉納が「徳性を涵養すること、智力を練ること、勝負の理論を百般のことに応用して物に接し事に當って自から処する所の方法に熟練させること」（嘉納，1889，p. 470）であるという。

2. 修心法としては目指す武道の目標は同じでありますから、結局指導者如何の問題に帰しますが、非常に精神的である点に於て数等優れてゐる事を信じます。

富木が「目指す武道の目標は同じ」と説く、武道の目標の具体的内容がここでは不明確だが、指導者の力量によるものの柔道と合気柔術でその目的が大体は同じであること、柔道より合気柔術を「非常に精神的」で優れたものとしている。

この精神的という評価には、植芝の信仰の問題も関係していると考えられる。植芝は1919（大正8）年に大本教指導者の出口王仁三郎（1871-1948）と出会って以降、信仰の道に入った。志々田によれば、植芝への出口の影響は大きく、富木が入門した時もそれは顕著であったという（志々田・成山，1987，p. 16，pp. 24-25）。同時代に植芝に入門した者の中には、植芝の技術指導には神の名前が出てきて、それと技術を関連付けて説明するものであったという回想もある（合気ニュース編，2006a，pp. 130-131）。

3. 慰心法としては講道館流に於ては美術感情

に訴へ云々と申しますが、この点なら却てこの柔術に於て見らるるところであると存じます。講道館流に於て優美な型としてかの「奔波走浪」の気持を表現するものとして「五つの型」があげられますが、これなどはこの柔術に於ては型としてに非ずして平常の稽古に於てこの気分を発露して居ります。又かの「柔の型」の如きもこの柔術に非常に相似たる点多く、「柔の型」に於ては併しながら全然呼吸のぬけた骨無になってゐるのが目につきます。尚進退姿勢の点であります。講道館流の如き女子が習得して決して美的姿態になり得るものとは思はれませぬがこの柔術の足腰の構へ身体の捌き一切踊り能としてゐますので此点は実に理想的と思ひます。

3点目の柔道を娯楽として修行する場合を指す慰心法について、富木は、柔道よりも合気柔術において慰心法を顕著に確認できるという。

嘉納が「真に勝負の形たる性質を離れ自ら美的情操を起さしむるものにして、其の見る者に快楽を感じしむる」と説き、講道館で「優美な型」と富木がみなす「五つの型」の「奔波走浪」の気分などは合気柔術では平常の稽古にみられるという^{註7)}。さらに「柔の型」に至っては、合気柔術と類似した点が多いものの柔道の柔の形は「全然呼吸の抜けた骨無」になっていると批判する。当時の柔道界における柔の形が等閑にされていたことを批判したものと考えられる。さらに、進退の方法や姿勢については、柔道は女子が習得しても「美的姿態」にはなりえないが、合気柔術の「足腰の構へ身体の捌き一切」が舞踊に近く、実に理想的と称賛している。

最後に勝負法（富木書簡では「護身法」）である。勝負法は嘉納が「人を殺そうと思へば殺すことが出来、傷めようと思へば傷めることが出来、捕へようと思へば捕へることが出来、又向ふより自分にその様なことを仕掛けて参ったとき此方では能く之を防ぐことの出来る術の練習を申します」（嘉納, 1889, p. 464）と述べているように、真剣勝負における攻防の技術である。

4. 護身法としては多く申し上げるまでも無く段違いであると存じます。

当時の植芝の技法には殺傷性を伴う技術がみられることが工藤により指摘されている（工藤, 2015a, p. 156, p. 162）が、この点に関して、富木は多く述べる必要もないほど「段違い」であるという。また書簡の別の箇所でも同内容のことが述べられている。

植芝先生がよく「講道館柔道など役にたつものか、本当の武術じゃない」と申されますが、実際その通りであります。護身術といふ方面から見れば全く無力であります。…が併し之をスポーツとしての観点に立ったならば大いに機能してゐると思ひます。茲に現在柔道の存在理由があるだろうと思ひます。

ここで植芝が富木に語ったという「武術」とは、まさに真剣勝負の場で役に立つ技術、護身術という観点を含んだものであり、この点で柔道は大きく劣るのだと富木自身だけでなく、植芝も同様に考えていたことがわかる。

それでは、そうした真の武術（護身術としての実戦性を持つ武術）はどのように習得できるのか。富木は以下のように指摘する。

- ・ 鍛錬法であります。…二つの方法があります。即ち一は型より乱取へ、一は乱取より型へ方法であります。講道館柔道のみならず現在の剣道に於ても後者をとってゐるやうであります。この点に於ても現在の武術は弱点を暴露して居るやうに思はれます。
- ・ 乱取を主とする弊としては自分の得意とする一方の業にも偏す傾きあり、且つ道をはずれて體力にのみ堕し易き事。
- ・ 併し體育としては或はこれによろしくからも、武術の真精神を会得するには先ず型によってその意味を顕はし、熟するに従つて乱取に入る方が誤なきやうに思はれます。

この柔術に於ては型を主とするのでありますが、その武術の真味を解するには寧ろ迂遠のやうで却て近路であり且つ誤りなきやうに思ひます。

・ ただ此処に私の最も優れてゐると思いますのは、型と申しても決して講道館流のそれの如く投げの型十五本、極の型何本と限られた固定したものでなく、如何なる場合をも予定した変通自在なものであって型即乱取りであります。

先述したが、嘉納は柔道の修行方法として形と乱取りの2つを併用し、修行者に興味を持たせるために乱取りを奨励した。結果的に競技が重視された柔道では形が軽視されてしまうのだが、その点を富木は嘉納と同じく批判している。乱取りを主にすると、得意技にしか習熟しない上に左右のバランスが崩れてしまい、しかも体力だけを尊重する結果になってしまうと富木はいう。前述の柔道体育法も本来は調和の取れた身体の発達を企図していたため、それとも関連のある指摘である。そして、護身術としての実戦性を意味する「武術の真精神を会得」するためには形稽古によりわざの理合を習得し、習熟するのに従い乱取り稽古に移った方がかえって近道になると富木はいうのである。これは、先述した老化しても技術が衰えないための稽古方法の1つであると考えられる。一般に合気道の稽古は形稽古によって行われる。当時の合気柔術も「型を主とする」ものであったが、その形は嘉納が「誰でもいきなり乱取を遣り、多数は殆ど形を顧みない」（嘉納，1930c, p. 3）と批判したような、乱取り稽古偏重の柔道で行われていたような形稽古ではなく、変幻自在な「型即乱取り」と呼べるものだったというのである。これはつまり、相手の1つの攻撃パターン（相手に手首を掴まれる等）に対して、1つの対処法を繰り返す稽古するという意味で固定化されたものではなく、攻撃パターンは固定化されたものであっても、そこから乱取りのように多様な対処法があったことがその内容であったと考えられる^{注8)}。

以上から、講道館柔道と合気柔術を比較した富木による武道技術論の出発点として以下の点が明らかになった。

①富木は、植芝の合気柔術を稽古することにより、嘉納の柔道体育・修心・慰心・勝負法が抱えていた当時の問題点を克服できると考えた。

②富木は、スポーツ化した柔道の乱取りを中心とした競技形式の稽古では会得が難しい、護身術としての総合性、実戦性を合気柔術では習得できると考えた。

③富木は、②を達成するためには特定の攻防のやり取りに限定されない多様なバリエーションを持つ形稽古が必要であり、それにより男女問わずに老化しても衰えない技術の習得も可能となると考えた。

こうした富木の武道技術論を、師である嘉納がどのように評価していたのかを示す史料は管見の限り見当たらないが、1936（昭和11）年の富木の訪問に対して嘉納は植芝の柔術研究が必要であることとその練習方法の困難さを説いたと言われ（富木著・志々田編・解説，1991, p. 273），嘉納が富木の研究を奨励していたと考えられる。

Ⅲ 戦前の富木の武道技術論の展開

ここでは、1942年に刊行される『離隔態勢の技』論文までに出された富木の各種論考を用いて、同時代における学校体育としての武道（特に徒手の武道種目である柔道）のあるべき指導法との関係もふまえ、富木の武道技術論の戦前の展開過程をみていく。

1. 『合気武術教程』（1937）

戦前に富木の武道論がある程度まとまった分量で語られるのは、前述した竹下への書簡から10年弱を経た1937（昭和12）年に刊行された『合気武術教程』（自刊）が初めてである。表紙には「関東憲兵隊教習隊教官 富木謙治」とある。8点ある凡例の1点目に「本教程は憲兵教習兵教育用として編纂せり。」とあるように、憲兵教習のためのテキストである。富木は緒言で以下のよ

うに述べている。

合気武術は…内容的には剣柔両道の根本原理に立脚し形式的には競技的規約条件に拘束せられざる^{ママ}純粹武道の立場にあり、其練磨の核心は短剣軍刀銃剣等の使術に一貫する根本原理の把握にあり、又其等使術を基礎としての心身の統一運用にあり。(富木, 1937, 頁数記載なし)

ここでは、合気武術が内容的には剣道と柔道の根本原理に立脚しており、形式的には競技ルールに拘束されることのない「純粹武道」の立場にあるという。そして、その練磨の核心が短剣や軍刀から銃剣等の用法に一貫する「根本原理」を理解し、心身の統一的な運用を可能にするという。前章の竹下宛書簡でも指摘されていた、植芝の武術の総合性や実戦性をふまえ、そこから剣道や柔道、さらにその他の武器の使用にも共通する「根本原理」を発見しようという研究の進展とみなすことができる。

同じく緒言において「所謂『体即剣』の妙用の体得を以て目的となせり」と合気武術体得の目的を示す。総則の第1でも「武の真髓たる剣気を練磨し柔理を体得し以て白兵戦闘に於ける『体即剣』の妙用に習熟せしむるにあり」(富木, 1937, p. 1)と述べており、戦時の近接戦闘を目的としていたこともわかるが、これは先述した本テキストの成立目的とも関係していよう。

しかし、「剣柔両道の根本原理」や、武の真髓として「剣気」と「柔理」を挙げていることは、武道における奥深い重要な要素を解明しようとした研究姿勢の表れとみなすことができる。「体即剣」の妙用についても「徒手に於けると同様の理合と体捌に^{ママ}より左記各種武器の使用及び敵の武器に対抗し得^{ママ}べし」(富木, 1937, p. 2)とあり、武器として短剣、軍刀、銃剣を挙げている。ここからは、徒手の技術の習得から武器への対処法、武器の使用法に通じる点も学ぶことができる教材として、富木が合気武術を評価していることがわかる。竹下宛の書簡でみられた、植芝の武術の総合性をふまえての指摘と考えられる。

表1 合気武術の教育体系

第一編 基本教育	第一章 徒手教育	第一節	基本動作
		第二節	抑技
		第三節	極技
	第二章 武器教育	第一節	短剣術教育
		第二節	軍刀術教育
		第三節	銃剣術教育
第二編 応用教育			

†: 本表は内容に即して筆者作成。

合気武術の教育体系については以下の目次(表1)をみることで確認できる。

これまで述べて来たように、合気武術は徒手を基本として、そこから武器の施術に至る教育体系となっている。特に基本教育については「基本教育は之を反復鍛練して武術の正しき理合と体捌に習熟せしめ実戦に於ける格闘の確乎たる基礎を作らしむるにあり」(富木, 1937, p. 4)とあるように、形稽古的に反復鍛練することの必要性が説かれている。応用教育については「基本教育をして状況地形に^{ママ}適応せしめ以て戦場に於て遭遇すべき格闘の要領を習得せしむるにあり」(富木, 1937, p. 4)とあるように、乱取り稽古については一切触れられていない。

指導者の役目として、富木は「徒手格闘術、短剣術、軍刀術、銃剣術等各術に於ける関係連絡を明にして習技者の自発的研究心を助成することを要す」(富木, 1937, p. 4)と述べ、合気武術の体系性を明確に習技者に示し、自発的研究心を喚起するように説いている。また、「習技者は常に教官の指導に従ひ専ら武術の理合と体捌とに留意し之か熟達を期すべし」(富木, 1937, p. 4)とあり、指導者の教導が重要であることがわかる。

また、「習技者は必ず左右相対称の技あることを忘れず^{ママ}修練することを要す」(p. 5)とあり、左右どちらかに偏した稽古にならないように注意を促している。調和のとれた身体の発達を目指す柔道体育法や、実戦における左右に偏らない技術の必要性を説いた柔道勝負法の観点と一致する指摘である。これも、竹下宛書簡で指摘されたよう

に、左右のどちらかに偏しやすい乱取り稽古ではなく、形稽古という練習方式を採用するからこそ強調できる点の1つであろう。

2. 「柔道の将来と合気武道」(1938)

富木は1938(昭和13)年から雑誌『柔道』に「柔道の将来と合気武道」と題する論考を5回に渡り連載している^{注9)}。その目次は以下の表2の通りである。

目次から明らかなように、この論考では合気武道の教育体系などは示されていない。この論考で富木は日本武道を「日本伝来の世界に誇るべき偉大なる芸術」であり、「古人が生死の巷にありて錬磨到達された心境の技術として客観化されたもの」とする。富木にとっての武道は、古人の研鑽の結果として技術的に客観化されたものであるため、「技術を度外視しての日本武道は考へることができない」(富木, 1938e, p. 10)という。

富木は第2章の題にあるように、武道の根本原理を「剣の気」と「柔の理」としている。前年に刊行された『合気武術教程』で挙げた「剣柔両道の根本原理」である「剣気」と「柔理」をより明確に定義したものである。剣の気と柔の理について、富木は前者を「統一力」、後者を「活用の妙」(富木, 1938a, p. 18)と簡単に述べる。古来真剣勝負が幾多の技ではなく、一刀のもとに決着がついたことにみられたように、剣の気とは「一瞬機微の間にその渾身の力を集中活用すること」、「精神の力と肉体の力が帰納統一されて、一如の発動となすとき戦はずして敵を感服する気魄

となり、『剣気』として迫る」(富木, 1938a, p. 19)ものである。つまり、心身が統一された時に最大限に発揮される力のことである。

柔の理とは、「千変の技と万化の術」の背景にあるもので、「力の緩急、体の変化のその機に先んじてこれを制して始めてその目的を達すること」(富木, 1938a, p. 19)である。換言すれば、相手の力や動きに柔軟に対応することである。

第3章「『精力最善活用』の哲理」では「講道館柔道の本義」かつ「日本武道の根本原理」を「精力最善活用」とし、上述した剣の気と柔の理(統一と活用)に関連付けて以下のように述べる。

「精力最善活用」は…剣の気と柔の理、即ち統一と活用を意味するものであつて、各種の流派や個々の技の体験を経て、これを組織大系化し、更にその普遍的属性を抽象把握して得た大原則である。しかして、それはたゞに攻撃防禦の術に於ける根本原則であるのみならず、この原則の適用は、即ち自己を完成し、大にしては国家社会の進歩発達を促すべき普遍的根本道である(富木, 1938b, p. 17)。

嘉納は柔道の根本原理を最初は「柔能制剛」に由来する「柔の理窟」(嘉納, 1926a, p. 649)に求めていたが、大正時代になると新しい定義として「精力最有効使用」、「精力最善活用」とする(嘉納, 1926b, pp. 3-4)。それに対し、「嘉納師範の個人的な人生哲学・处世哲学」であるうえに「少しも柔道の特質を規定して」おらず「何等の独自性がないため、論理的でない」という嘉納の弟子の岡部平太の批判もみられた(岡部, 1960, pp. 375-376)。つまり、嘉納の柔道の根本原理である「精力最善活用」の抽象的な部分を、富木は武道の根本原理とみなした剣の気と柔の理で補強し、攻撃防御の技術の根本原則と改めて定義したのである。

第4章「武道の本質とその競技化」において、富木は技術的見地から武道の本質を以下のように述べている。

表2 「柔道の将来と合気武道」目次

第一章	絶対に至る道としての日本武道
第二章	武道の根本原理：剣の気と柔の理
第三章	「精力最善活用」の哲理
第四章	武道の本質とその競技化
第五章	競技化に伴ふ難問題
第六章	講道館柔道と武道一元化の理想
第七章	柔道の将来と合気武道

†：本表は内容に即して筆者作成。

一、非常手段としての行為であるから、その実施は必ず危険性をともなふこと

二、攻撃防禦の術として各種の場合を総合的に研究せらるべきこと（富木、1938b, p. 19）

これらは竹下宛の書簡に既にみられた富木の問題意識であるが、こうした武道の技術的本質とする危険性、総合的研究の必要性から、富木は競技化を「武道の本質より遠ざかる結果を招来するもの」（富木、1938c, p. 11）と批判する。競技者が同じ条件の下に行われる試合による修行では、その競技の条件（規則）に限定されてしまい、それぞれの競技による部分的発達となってしまうからである。

富木はこうした競技形式の稽古の抱える問題点から、ここでも形による稽古の重要性を説く。富木によれば形とは「真剣勝負の体験と理法技術の究明とにより、しかも数十百年に亙る苦心の結晶として、その精妙を相伝せられたものであつて、修行上の根本的指針」（富木、1938b, p. 19）である。

富木は形稽古の長所として、怪我の少ないこと、競技のように条件や規約に制限されない「自由無碍」な立場で技術研究が可能なことを挙げている（富木、1938c, p. 12）。一方、短所として、勝負の結果に伴う「感情の刺戟、拍車」を欠くために「非常なる根気と忍耐心」を必要とすること、「実力の養成の実際の活用の範囲」に疑問が生じやすいこと、形の「真生命を忘却喪失」した結果、形式化・舞踊化することの3点を挙げている。短所の3点目は、竹下への書簡でもみられた当時の柔道修行者が稽古する形への批判と同内容のものである。

富木が形稽古の重要性を主張したのは、「競技的条件を前提としては、到底達し難き研究分野」、つまり「絶対的武力の獲得を目標としての武術の総合的研究」（富木、1938d, p. 10）が必要なためである。富木は「武術としての柔道の研究」が乱取りのみに終始しては、「攻撃を目的としての『精力最善活用』の原理に直に到達することは六ヶ敷い」（富木、1938d, p. 11）と乱取り

のみの稽古を批判する。そしてそれは、嘉納が「武術としての柔道は、無手術はもちろん、剣術、棒術、槍術、弓術、薙刀その他あらゆる武術を包含する」（嘉納治五郎先生伝記編纂会編、1964, pp. 369-370）とした「武道一元化の理想」（富木、1938d, pp. 10-12）に基づくものであったという（第6章）。

ではこうした武道を一元化するという構想は、武術の実践において具体的にどのように実現されるのか。富木はその答えを柔道と剣道、合気武道の技術的接点の中に見出す。富木によれば、柔道の技術の大部分は「相手の体の上部と下部に『偶力』を作用して投げる」ことにより構成されているという。具体的には、「相手の崩れた方向へ手を以て引き、それを反対の方向へ足または腰を以て拂ふ」ような力の用い方である。「偶力」には2点への力の集中を必要とするが、攻撃の理想は「一部練達の柔道家が研究到達」しているように、「一点一方向への力の集中」であるという。「最も巧妙に最も理想的に『作』られた場合は、『掛け』の力の最も減少された場合」に起こるからである（富木、1938d, pp. 11-12）。

後の『離隔態勢の技』論文で明確に指摘される（富木、1942a, p. 93）が、具体的には当身技のことを指す。この力で相手を倒すときに初めて「剣道の気合と一致」（富木、1938d, p. 12）するというのである。また、防御の理想は「敵に一指だをも触れさせることなし体の変化によりてこれを制御」することとし、そのためには「敵の動作を未発に察知する眼の働きと、敵との距離」、別言して「目付と間合の原理」（富木、1938d, p. 12）の研究が必要だという。これが、攻防の局面において剣道の術理と柔道の術理を融合させることの意味である。

そしてこの構想も、嘉納の武術としての柔道論を継承したものであった。嘉納は1918（大正7）年の論説「柔道に上中下三段の柔道の別あることを論ず」において、「従来の柔道と剣道とは、合体して一のものになる筈と思ふ。」（嘉納、1918, p. 5）と述べている。この点について、剣道が柔道の内に入るべき最必要の要素であると嘉納が主

張した理由を考察した志々田は、「体さばきを錬磨することが攻撃防禦の方法としての柔道に要求された」（志々田，1979，p. 18）ことを指摘している。

また、富木は格闘術を「徒手格闘術」と「持武器格闘術」に二分し、これら全ての場合に対し、「各種の術を個別的に習熟するのではなく、一貫した原理と体系のもとに、総合的研究」をしなければならないという。しかも、それは1対1の場合に限らず、「一人対一人の研究が、そのまゝ時間的にも空間的にも数敵^マに対し得べき原理原則のもとに研究体系づけられなければならない」（富木，1938e，pp. 9-10）という。富木にとって、一貫した武道の根本原理と体系に基づく総合的な研究が重要であったことが明らかであろう。

以上のまとめとして、富木は将来の講道館柔道が研究発達しなければならない以下の5点を挙げている。①武道の本質に即した技術的研究。②「純粹武道乃至原始武道」は競技武道とは別個の立場より研究しなければならないが、両者の間には「理論的にも技術的にも画然整然たる体系」を作らなければならない。③競技武道は「純粹の武道の立場」から常に批判的に観察し、競技化の弊に陥らないようにする必要がある。④競技武道の発達と併行して、純粹の武道も何らかの方法によって奨励発達させねばならない。⑤純粹の武道は「武術の総合的研究」を意味する（富木，1938e，p. 11）。3点目に明確に示されているように、武道の競技化の弊害を富木は意識していたのである。そして、これらの課題を解決するのが植芝の合気武道だと富木は説く^{注10}。富木によれば、合気武道には先述した形稽古に伴う問題点を解決する「他の多くの所謂古流武術には殆ど見ることできぬ特色」があるとして、以下のように説明する。

形の習得はそのまゝ精神と体力とを錬磨し自然に応用の妙を悟り得るのであって、この形による修行が直に主観的にも客観的にも実力に対する自信力をつけ得ることである（富木，1938e，p. 11）。

竹下宛書簡で「型即乱取り」と評した植芝の合気武道の形稽古の利点を述べている。しかし、この論考では合気武道の修行上の問題点も挙げている。合気武道の欠点として、「その技の余りに広汎なること、その変化のまた余りに多きことなどが修行者にその核心の把握を困難」とさせること、そしてその教育的体系や方法については、「必ずしも現代の普遍化の要求や団体的教育の要求に合致」（富木，1938e，p. 11）しないというが、当時の植芝の技法が多く^マの技術数と格闘形態を持っていたことが技術史的に指摘されており（工藤，2015a），富木の指摘は的確なものと考えられる。

こうした合気武道の修行上の問題点の指摘は竹下宛書簡にはみられなかったもので、富木の研究の進展とみなすことができ、こうした欠点があるからこそ前述の一貫した原理と体系に基づいた総合的研究が必要とされたのである。

以上、「柔道の将来と合気武道」では竹下宛書簡や『合気武術教程』に比べて、武道の根本原理の指摘や植芝の合気武道の学習上の欠点の指摘などで明確な進展がみられたが、合気武道の具体的な学習体系までは示されておらず、それは『離隔態勢の技』論文の完成を俟つことになる。しかし、こうした武道の技術的側面への着目が随所にみられ、それは富木に一貫した研究姿勢である。

3. 『柔道に於ける離隔態勢の技の体系的研究：柔道原理と合気武道の技法』（1942）

1940（昭和15）年、植芝から合気道界初の八段を許された富木は、この年より1944年頃まで、毎年夏に、講道館「離隔態勢の技の研究委員会」において講習を行っていた（富木著・志々田編・解説，1991，p. 284）。既に嘉納は亡くなっていたが、志々田が指摘したように、当時の柔道界が抱えた問題として、「離れたところからの当身技等による攻撃に対して、いかにして安全確実に勝利することができるか」（志々田，1979，p. 49）ということがあったという。

本論文は、建国大学教授であった富木の『『離隔態勢に於て敵を制御する技』に対する答申案』

であると同時に、富木が「将来の柔道に対して抱く実践的具体案」(富木, 1942a, p. 6)である。戦前の富木の著作の中では分量・内容ともに最も充実した研究論文である^{注11)}。富木が述べる離隔態勢の技とは、互いに離れた間合である「離隔態勢に於いて敵を制禦する技」であり、「真剣勝負にあたつて敵を攻撃し且つ敵の攻撃を防禦する技」(富木, 1942a, p. 87)を指す。

また、副題にもあるように、「柔道原理」という新たな概念が提示されている。志々田は富木が「剣道の理法をもって『柔道の根本理法』」としたことを富木の卓見とし、本論文の意義を、柔道原理という「高度化された原理でもって『離隔態勢における技』即ち真剣勝負の技を分析し、その修行体系を提示したこと」(志々田, 1979, pp. 55-56)と指摘している。しかし、富木は柔道原理の具体的内容にまで本論文では言及しておらず、後述する剣の気と柔の理との関係も明確ではない。これらは戦後の富木の研究に持ち越されるため、ここでは、これまでの富木の武道技術論をふまえて、志々田が言及しなかった、富木が構築した合気武道の教育体系に着目する。目次は以下の表3の通りである。

この論文においても、富木は「日本武道の根本原理」として「剣の気」と「柔の理」を挙げている^{注12)}。柔道の真髄はその修行を通じて「剣の気」と「柔の理」を悟得することにある、しかも「その修行の核心は乱取の練磨工夫の中」に見出せると富木は主張する(富木, 1942a, p. 4)。「乱取^{ママ}によつて体得し得た円融無碍の妙理と秋霜烈日の勝負の気魄とを新しき姿にいかに盛り込むか」、「柔道の本体たる乱取の理法をいかにして新時

代の要望する形式にまで展開するか」(富木, 1942a, p. 5)というように、競技方式の稽古である乱取りを否定していない。つまり、「柔道の将来と合気武道」論考でも否定されていた競技化の弊害とは、勝利至上主義に支配された、行き過ぎた競技試合のことを指し、乱取り稽古という競技形式の稽古そのものが否定されていたわけではないのである。

富木は、本論文執筆当時を「武道教育に期待するところ大となり」つつあるとし、柔道の内容形式こそが「最も新時代の要求する武道教育である」という。そのためには、「『離隔態勢』を前提とする真剣勝負の技」についても、「『組方』を前提とする乱取の技の如き整然たる修行体系を確立」する必要がある、「この修行上の二体系を併立してしかもその間に原理的理法の一貫性を持ちつゝ究明展開することによつて、柔道は内容的にも形式的にも深化拡大され、現代国民の練成上一層の成果」(富木, 1942a, p. 6)を挙げることができるという。ここでは本論文の成立事情もあってか柔道の「深化拡大」という成果が期待されているが、真剣勝負の技術と乱取の技術に「原理的理法の一貫性」が必要とされている点が、研究上の進展である。

本論文での富木の武道技術論の進展を2点指摘できる。1点目は、「総合武道としての柔道」の根本理法を定義したことである(第二章)。富木が規定した武道の根本理法とは「先」、「目付」、「構へと姿勢」、「進退」、「間合」、「作りと掛け」である。これらが今日の武道論においても妥当な内容であるかは、本研究の目的を超えた課題であるためここでは言及しないが、富木のこの試み自体は今日においても評価できる。現代では異なる武道と認識される、柔道と合気武道、さらに剣道の間に、武道としての原理的一貫性を持たせるために根本の理法を規定することは、様々な武道の種目が必修となった今日において、武道は体育として何を教えるべきか(武道の根本となる原理、理法は何か)という問いに対しても1つのモデルケースを示していると考えられるためである。

本論文における富木の武道技術論の進展の2

表3 『柔道に於ける離隔態勢の技の体系的研究』目次

第一章 柔道の修行法
第二章 根本理法
第三章 「離隔態勢の技」の修行体系
第四章 「離隔態勢の技」の基本の形
第五章 武道の真髄と「自然体」の妙用

†: 本表は内容に即して筆者作成。

点目として、離隔態勢の技の教育体系を示すと共に、合気武道の技法から教育体系の核心とする徒手教育の練習法を体系的に示した12本の「基本の技」を制定したことが挙げられる（第3，4章）．そしてその教育体系の作成方針を以下のように富木は述べている．

真剣勝負の技は理法的には「離隔態勢」に於いて相対峙することを前提として組織立てられ技術的には「当技」を出発点としてこれより体系的に「抑技」「極技」などへ展開されなければならぬ（富木，1942a，p. 89）

つまり、柔道のお互いに襟袖に組んだ状態で行われる乱取りの稽古体系には取り入れられていない離れた間合で相手と対することを前提とし、当身技を起点にそこから抑え技、関節技等へ技術的に展開するよう組織立てる必要があるというのである．そして、以下のように「離隔態勢の技の修行体系」（表4）を示している．

富木によれば、離隔態勢の技の教育体系は「基本教育」と「応用教育」に分けられ、それぞれ「徒手教育」と「武器教育」に分けられる．基本教育は「基本動作」と「基本の技」とに分けられる．基本動作には1人で行う「単独動作」と、相手と相対して行う「相対動作」がある．富木によれば、基本動作は『離隔態勢の技』の全体系

の中心であり、且つ出発点」であり、「武道の根幹たるべき修練」（富木，1942a，p. 92）と位置付けている．基本動作では「構へ」、「軀体」、「転廻」の3種の単独動作、当身技による打込みとその防御方法を練習する相対動作から構成される．基本の技は「当技」3本、「抑技」2本、「極技」3本、「転廻技」2本、「後技」2本より構成されており、何れも柔道の乱取り稽古で行われる襟袖に組み付いた格闘形態に限定されない技術である．

さらに、徒手教育の意義を以下のように述べる．

徒手教育に於ける術理を十分に体得すれば、その理を推して自ら武器の使術も会得されるところに柔道修行の特長があり現代の要請する新武道としての柔道修行の意義がある（富木，1942a，p. 92）．

つまり、富木はまず約束された動作を反復する基本動作を中心に置き、徒手の技術を十分に習得することが武器の使用にも有益と考えていたことがわかる．そしてそれはこれまでみてきたように、徒手と武器を用いた格闘との間に、共通する原理を発見したことで可能になったものである．

富木は本論文においても、「武道の本質に即した危険性を有する技法」（富木，1942a，p. 23）を学ぶために形稽古の必要性を説く．「柔道の将来と合気武道」で挙げた形稽古の長所3点に加え、「道を尊び伝統を重ずる精神を涵養する」こと、老若男女修行可能であること、あらゆる動作を総合的に練習することで全身の筋肉を調和的に発達させることが可能で「体育的見地から見て合理的」であることを挙げる^{注13)}．伝統を重んずる精神を涵養する点は、武道が必修化された今日、中学校保健体育科の改善の基本方針の中で「その学習を通じて我が国固有の伝統や文化に、より一層触れることができるよう指導の在り方を改善する」（文部科学省，2008，p. 3）という文言にも合致するものである．また、老若男女修行可能であるという点は、男女共修で武道の授業が行われる今日にも形稽古が有益であることを教えてい

表4 離隔態勢の技の修行体系

一 基本教育	(一) 徒手教育	一 基本動作
		二 基本の技
	(二) 武器教育	一 基本動作
		二 基本の技
二 応用教育	(一) 徒手教育	一 「離隔態勢の技」より「組方の技」への連絡
		二 基本の技の連絡
		三 乱取指導
	(二) 武器教育 (短剣、軍刀、銃剣)	一 基本動作の応用
		二 基本の技の応用

†：本表は内容に即して筆者作成．

る。体育的見地から合理的であるということは、竹下への書簡にもみられた当時の柔道体育法の抱えていた問題点をふまえたものである。

一方、乱取り稽古は離隔態勢の技の教育体系においては「二 応用教育」の徒手教育の最後に位置付けられている。富木は離隔態勢の技術が危険性を伴う技術が多いことをふまえて、「形を重じ形の繰返しによつてこれを徹底体得した後でなければ、その応用としての乱取修行が許されない」（富木、1942a, p. 92）と乱取りを初学者には許していないのである。さらに、乱取り指導に際して以下のように条件を付ける。

指導者が指導的立場に於いて修行者の実力の向上に応じて、周到なる用意のもとにこれを乱取指導し、もつて基本の技の変化応用を実地に体験せしめ且つ実戦に処する確固たる自信力を養ふことができる。（富木、1942a, pp. 97-98）

竹下勇宛書簡や『合気武術教程』では、植芝の武術の指導に際して指導者の役目が重要であることが挙げられていたが、『離隔態勢の技』論文において、指導者の十分な用意と指導があれば乱取りの指導も可能であることが言及されている^{注14}。しかし、本論文においても重点はあくまで形稽古に置かれていたのである。

植芝の技法が膨大な技術数と多様な格闘形態を持っていたことは先述したが、武道の根本理法を自身の修行体験から帰納的に導き出し、そこから演繹的に形を制定し、学習時間の限られた修行者のための教育体系を制定したことが本論文における富木の成果である。

4. 学校体育における武道の取り扱いからみた富木の武道技術論の独自性

ここでは、学校体育における武道の中で、特に富木が研究した柔道の取り扱いと比較しながら、富木の武道技術論の独自性をみていく^{注15}。武道は1911（明治44）年に中学校令施行規則、1912（明治45）年の師範学校規定の改正と共に、体操科教材の随意科として正課に加えられた（名称は

「撃剣及柔術」）。

現代の学習指導要領に相当する「学校体操教授要目」は1913（大正2）年に初めて制定される。そこでは「中学校及師範学校男生徒にありては撃剣及柔術を加ふることを得」とあり、その教授方法については「別に一定の方式を示さず、従来の方法に依り適宜之を授くべし」とあり、明確な指導内容は記されていない。武道種目としては、撃剣と柔術の他に「体操科教授時間外に行ふべき諸運動」として、「角力（男子）、弓術、薙刀（女子）」が挙げられており、当時既に様々な種目が実施可能であったことがわかる。教授の際の注意として、撃剣と柔術は「其主眼とする所、心身の鍛錬に在りと雖も、特に精神的訓練に重きを置くべし、技術の末に奔り、勝敗を争ふを目的とするが如き弊を避くるを要す」（渡辺編、1987d, p. 1）とあり、精神の教育を重視すべきであり、単に勝敗を争うのを目的とするような武道の競技化に伴う弊害に対する批判もみられる。

富木が植芝に入門したのと同年の1926（大正15）年に学校体操教授要目は改正され、「撃剣及柔術」が「剣道及柔道」と表記される。その中の「体操科の教材」には「男子の師範学校、中学校に在りては、剣道及柔道を加ふることを得」とあり、まだ武道種目は男子のみに限定されている。また、「剣道及柔道に関しては、一定の方式を示さざるも、適当なる方法を定めて之を授くべし。」（渡辺編、1987c, p. 30）とあるように、まだ、明確な指導内容は記されていない。武道種目としては、剣道と柔道の他に「体操科教授時間外に於て行ふべき諸運動」として、「弓道、角力、薙刀」（渡辺編、1987c, p. 31）が挙げられているのも改正前と変化がない。教授上の注意として、「剣道及柔道、競技等に在りては、特に礼節を重じ、徒に勝敗に捉はるるが如きことあるべからず。」（渡辺編、1987c, p. 31）とあり、礼節と勝敗に拘泥しない精神が重視されている。中嶋（2013, 2014）が指摘したように、大正期以降に各種学校間での対抗試合が盛んとなると共に、柔道では勝利への執着が次第に加熱しており、そうした問題をふまえた注意と考えられる。

1931（昭和6）年，師範学校規定改正と中学校令施行規則改正に伴い，「男生徒に就きては剣道及柔道を加へ授くべし」（渡辺編，1987b，p. 5）とあるように必修となる。

1936（昭和11）年，学校体操教授要目が改正され，体操科の教材として「男子の師範学校，中学校及男子の実業学校に於ては剣道及柔道を加ふべく，又弓道を加ふることを得，女子の師範学校，高等女学校及女子の実業学校に在りては弓道，薙刀加ふることを得」（渡辺編，1987a，p. 3）とあり，種目数が増えている。また，「教授上の注意」には以下のようにある。

十三 剣道の教授は主として稽古及試合に依るべきも其の基本動作及応用動作に就ては十分なる指導をなすべし

十四 柔道の教授は乱取を以て主とすべきも特に技の基礎的練習を重んずべく乱取に於ては投技を主とし固技を従とすべし

十五 剣道及柔道の教授に当りては適当なる機会に講話を行ひ実地の修練と相俟ち其の効果を挙ぐることに力むべし（渡辺編，1987a，p. 4）

剣道，柔道共に，基本の練習も軽んじられていないものの，競技形式の稽古を中心にすべきであることがわかる。しかし，柔道で投技を中心にすべきであるという注意は，嘉納が柔道における武術性の観点から再三警告していたものであり（永木，2008b，p. 6），富木のように武術性を重視する考えが当時珍しいものではなかったことを示している。

さらに，この教授要目では剣道と柔道の教授内容と方法が初めて示される。柔道は「基本動作」，「乱取技」，「形」，「講話」から構成されており，その中の「中学校及男子実業」と「師範第一部男子」の教材の配当表（第三表と第六表）の柔道には，形として「基本の形」が挙げられている（渡辺編，1987a，p. 7，p. 9）。これは当時東京高等師範学校教授であった櫻庭武（渡辺編，1987a，p. 12）の解説によれば，「精力善用国民体育」の

方法を取っており，当身技の習得も目指したものになっているという^{注16)}。さらに，中等学校における柔道教授の目的として「姿勢正しく，進退動作，力の運用等，方に叶ひ，攻防変化自由であつて，心身自在の域に到達するための，本道を踏む乱取」（渡辺編，1987a，p. 12）を中心としているという。このように，柔道競技では用いられない当身技の習得や勝利至上主義に陥った変則的な乱取りにならないことが体育としての柔道には求められていたのである。また，中村が指摘したように，「国民思想善導策としての側面」が剣道や柔道には期待されるようになり，「スポーツの浸透による競技主義を批判し，それに代わり得る国家主義的な武道精神の注入」（中村，1994，p. 354）が目指されるようになっていく。このように，武道においては競技化への批判と国家主義的な武道精神の養成が同時代的に目指されていたのである。

1941（昭和16）年，国民学校令の公布により，小学校は国民学校と改称され，体操科も体錬科と改められる（中学校，師範学校も同様）。翌年発せられた「国民学校体錬科教授要項」の「三教授上の注意」には，武道に関して「三十二 武道は常に攻撃を主眼として修練せしむべし」と戦技化する武道の様子が確認できる。また，「三十三 武道は剣道柔道何れにも偏することなく之を併せ課し柔道に在りては左右の技を共に修練せしむべし」と，富木が述べたような武道一元化の方向性も看取される。「三十四 武道に於ては特に反復練習せしめ基礎的訓練の徹底を期すると共に応用的取扱に留意すべし」（渡辺編，1987a，p. 47）と，基礎の重視と応用的展開も注意がなされている。体錬科武道の教材を学年ごとに記した「第二表 其の二 柔道」には，基本，応用，稽古，講話の4種の種別の基本の中に「当身技」が，応用の中に「極技」^{注17)}が明確に記されており，初等科から当身技の用い方と当身技への対処法を学習することが明示されている（渡辺編，1987a，pp. 49-50）。

以上みてきたように，富木の武道技術論の戦前における展開過程は，競技化の批判や当身技の習

得を目指した点で学校武道の戦技化と軌を同じくしている。その一方、学校武道における柔道が当身技などを取り入れていくことは富木の武道技術論にも共通していたが、富木は柔道競技では用いられない手首関節技なども『離隔態勢の技』論文の基本の形として取り入れていた。戦前における富木の武道技術論は、戦技化する学校武道と当身技の重視という点で共通点を持ちながらも、嘉納の武術としての柔道論をより具体的に追求していたのである。

Ⅳ 結 論

本研究では、合気道の基盤形成期に植芝入門し、講道館柔道と合気道を比較研究した富木謙治の武道技術論の出発点と戦前における展開を、嘉納治五郎の武術としての柔道論の富木への継承をふまえて、1942（昭和17）年に『柔道に於ける離隔態勢の技の体系的研究』論文が提出されるまで検討した。結果として以下のことが明らかになった。

1928（昭和3）年に富木が竹下に宛てた書簡には、富木の武道技術論の出発点が確認できる。競技柔道に慣れ親しみつつもその限界を克服する方法を模索していた富木が植芝の合気柔術に対して抱いた関心は、多くの格闘形態を想定した技術的な総合性と殺傷性にあった。富木にとって武道の基本は徒手の技術から出発し、そこから武器を用いた技術を総合的に学習すべきと考えていた。これらは何れも学生時代から警咳に接していた嘉納の武術としての柔道論の影響を受けたものであり、富木は嘉納の柔道体系論の勝負法を中心として継承しつつも、植芝の合気柔術を研究することで残りの体育・修心・慰心法が当時抱えていた問題点も克服することができると考えた。具体的には「型即乱取り」と富木が称した、1つの攻撃パターンに対して多様な技術へと展開可能な技術的総合性を持った形稽古が富木の武道技術論の出発点であった。

戦前の富木の著作では、武道の根本原理の把握が試みられる。「剣（の）気」「柔（の）理」と表

現されたそれらは、徒手の技術から武器の技術までの運用を可能にする富木の技術論であり、嘉納が打ち出した「精力善用」という柔道の原理の曖昧な部分を技術的に補足したものであった。

1942（昭和17）年に刊行された『離隔態勢の技』論文では、乱取り稽古と真剣勝負の技術を意味する離隔態勢の技の形稽古の間に原理の一貫性を持たせることが試みられ、剣道の要素を取り入れた6つの武道の根本理法、離隔態勢の技の教育体系、そして基本の技と呼ばれる形12本が制定された。それらは、徒手の技術を体得することで武器の使用も可能になること、柔道の乱取り稽古では取り入れられていない、離れた間合で相手と対することを前提とし、当身技を起点にそこから抑え技、関節技等へ技術的に展開するよう体系立てた点に、富木の研究成果がみられた。

戦前の富木の武道技術論に一貫した点は、武道の競技化と形稽古それぞれの長所と短所をふまえたうえで、形稽古の優位を説いていることである。離隔態勢の技による乱取り稽古の存在も『離隔態勢の技』論文では指摘されているが、中心となるものではなく、応用という位置付けであり、指導者の教導が重視されていた。

また、富木の武道技術論における当身技の重視などは、学校武道の戦技化とも共通する点があるが、本研究で検討した理論的出発点や、手首への関節技を研究していることから、富木の関心はあくまでも嘉納の武術としての柔道論の追求にあった。こうした点で、富木は嘉納の柔道思想を武術としての柔道論を中心に継承し、当時の行き過ぎた武道の競技化を批判したのである。戦後において富木がなぜ合気道の競技化を志向したか、富木の武道技術論の戦後の展開の詳細な検討や、嘉納の柔道論が富木以外の弟子へどのように継承されたのかについては、今後の課題としたい。

付記

本稿は、NPO 法人日本合気道協会 新春稽古会（2016年1月11日）における筆者講演の配布資料を加筆・修正したものである。本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（B）

課題番号：15H03067)の助成を受けて得られた研究成果の一部である。

富木謙治の竹下勇宛書簡の原本史料の閲覧の許可を頂いた近藤勝之氏に深く御礼申し上げる。

注

注 1) 従来の先行研究では、嘉納が柔道を近代日本においてどのような身体運動文化として体系立て、教育的価値を付与しつつ構築したかについて研究が積み上げられてきた(永木, 2008a, 2008b; 寒川, 1994)。一方で、中嶋の先行研究では、嘉納の柔道論の根幹をなす「精力善用, 自他共栄」に対する批判が存在したこと(中嶋, 2011)や、学生柔道の競技化が進む中で嘉納の理念とは相容れない状況が生まれてきたことが明らかにされている(中嶋, 2014)。

注 2) 合気道における試合(競技)の禁止は、創始者である植芝の思想的影響が大きい。これについては工藤(2015b, pp. 368-375)を参照。

注 3) 書簡の日付には「昭和三年 九月十九日」とある。筆者は、竹下の遺族から提供を受けた、大東流合気柔術本部長・近藤勝之氏が所蔵する原本史料を閲覧した(2016年6月14日撮影)。草書混じりの文字で記録された書簡で、縦21.4 cm, 横18.2 cmの縦書き便箋17枚に、講道館柔道と合気柔術の比較、植芝の信仰に対しての富木の意見などが記されている。

注 4) 竹下の日記は現在、国立国会図書館憲政資料室に所蔵されている。

注 5) 志々田によれば、植芝は竹下に指導した当初は自身の武術を「大東流合気柔術」と称して指導しており、1928(昭和3)年には竹下らの後援を得て「相生流合気柔術」を名乗ることで大東流からの独立を志向し、1929年には「合気武術」を名乗るようになるという(志々田, 1992, p. 6)。工藤が明らかにしたように、1931(昭和6)年には「合気武道」と名称が変更されている(工藤, 2015b, pp. 213-214)。

注 6) これら3点の詳細については寒川(1994)を参照。寒川は嘉納の柔道体系論が考察される歴史的経緯を考察し、勝負法に近世の柔術との連続性があること、修心法で達成される理想の精神に新たな性格が付与されたこと、体育法こそが嘉納の柔道体系論の中心かつ独自性だと指摘している。

注 7) 日本文化における「型」について考察した源の研究によれば、形は試行錯誤のなかで繰り返し洗

練することで「機能性, 合理性, 安定性」を持ち、「一種の美」を備えるようになった「完成された形」, 「型」となるという(源, 1989, p. 14)。柔道では通常「形」の字を用いていること、以後の資料で富木は「形」の字のみを用いていることから、富木がこの書簡で用いた「型」は「形」とほぼ同義で用いられていると考えられる。

注 8) この点について、工藤は『乾』, 『坤』に記された技術を格闘形態ごとに表にした際、植芝の技術が1つの格闘形態をとっても多彩なバリエーションを持っていたことを明らかにしている(工藤, 2015a, p. 152)。例えば、相手に両手で両手首を掴まれた場合に213手の技術が両史料には記されている。また、当時の植芝の弟子達の証言にも植芝の指導法が系統だっていなかったことが指摘されており、植芝の技法が固定化せず自在に変化するものであったことが窺える(合気ニュース編, 2006a, pp. 182-183, pp. 198-199)。

注 9) 連載第2回目より編集者は「合気武道」と改題している。改題の理由を編集者は読者より多くの意見があったためとしているが、その具体的内容は明示されていない。また、富木の論考において、「武道」と「武術」の概念は明確に定義されていないが、内容を検討する限り、柔道など明治以降に近代化したものを武道、それ以前のものを武術(技術的な内容が中心)として使い分けしているようである。

注10) 嘉納は1930(昭和5)年に植芝の道場を弟子と共に訪れ、稽古を見学した。その際、嘉納は植芝の武術を「本当の柔道」と称賛し、その後、弟子を植芝の下に派遣している(合気ニュース編, 1985, p. 7)。嘉納が植芝の技法のどのような点に感銘を受けたかは不明であるが、本研究でみてきたように、嘉納の武術としての柔道論に影響を受けた富木と嘉納の問題意識は近いものにあったと考えられる。

注11) 同時期に著されたと考えられる富木の著作に『合気武道』がある。奥付が無く、正確な執筆年は不明であるが、表紙に「建国大学教授 満洲帝国武道会師範 富木謙治著」とあることから、富木が建国大学教授となる1941年(富木著・志々田編・解説, 1991, p. 284)以降のものと考えられる。内容がより充実していることから、本研究では『離隔態勢の技』論文を用いた。戦前に出されたその他の富木の著述としては、管見の限り、『体術教程』(富木, 1943a), 「日本武道の美と力」(富木, 1943b)を挙げることができる。『体術教

程』は陸軍憲兵学校で出されたもので、一般向けには出版されていない。写真を豊富に示した技術書である。「日本武道の美と力」は建国大学研究院から出された論文集「研究期報」に収載された論文である。

- 注12) 「剣の気」と「柔の理」について、富木は前者を「いかなる障碍をも超克して押し進もうとする大精神が純粹統一されて心身一如の力として送り出たもの」、後者を「克己持正よく境遇に順応しつつしかもこれを超えてその目的を達成する心身活用の妙理」(富木, 1942a, p. 2)としており、「柔道の将来と合気武道」と概ね同じである。同様の定義は、同年刊行された富木(1942b)の「日本武道の真髓」という論文にも使用されている。
- 注13) 富木は形稽古の短所として、「一般的普及奨励」が不便なこと、修行を継続するモチベーションの持続が難しいこと、修行が形式化しやすいことの3点を挙げている(富木, 1942a, pp. 23-25)が、これは「柔道の将来と合気武道」論考とほぼ同じである。
- 注14) 富木は「離隔態勢の技」を用いた乱取り稽古が、その技術に危険性が伴うことから困難であることを指摘する。しかし、指導者が修行者の実力を見極め、周到な用意のもと乱取り指導すれば「基本の技の変化応用を実地に体験」し「実戦に処する確固たる自信力を養」(富木, 1942a, pp. 97-98)うことができると乱取り稽古の意義も述べている。
- 注15) 学校武道の歴史については本村(2007)、中村(1994)を参照。特に中村の研究は資料も詳細に紹介され、学校武道における剣道の位置付けが詳細に記されている。
- 注16) 小学校の武道は1939(昭和14)年の「小学校武道指導要目」が発せられ準正科として実施されるが、同要目の柔道には「イ、単独動作」と「ロ、相対動作」共に当身技の習得が企図された内容になっている(渡辺編, 1987a, pp. 19-20)。
- 注17) 同教授要項実施細目の「(二)柔道実施細目」という表には、初等科第5学年、第6学年、高等科第1学年、第2学年のいずれも、当身技の目的として「打突の修練をなし旺盛なる攻撃精神を涵養す」と、極技には「相手の攻撃に対する打突の修練をなし捨身の心境と勇猛果敢なる攻撃精神とす」(渡辺編, 1987a, pp. 62-63, pp. 67-68, pp. 70-71)とある。

文 献

- 合気ニュース編(1985)古武道の第一人者・杉野嘉男先生に聞く。合気ニュース, 69: 5-13.
- 合気ニュース編(2006a)決定版 開祖を語る直弟子たち 植芝盛平と合気道Ⅰ。合気ニュース。
- 合気ニュース編(2006b)決定版 開祖を語る直弟子たち 植芝盛平と合気道Ⅱ。合気ニュース。
- 井上 俊(2004)武道の誕生。吉川弘文館。
- 嘉納治五郎(1889)柔道一班並二其教育上ノ価値。大日本教育会雑誌, 12: 446-481.
- 嘉納治五郎(1913)柔道概説。磯貝一編, 柔道概要。武乃世界発行所, pp. 1-27.
- 嘉納治五郎(1918)柔道に上中下三段の別あることを論ず。柔道, 4(7): 2-7.
- 嘉納治五郎(1926a)武道篇 柔道。武井文夫編, 新日本史第四巻。万朝報社, pp. 637-657.
- 嘉納治五郎(1926b)講道館柔道と講道館の使命及び事業に就いて。作興, 5(3): 2-7.
- 嘉納治五郎(1930a)道場に於ける形乱取練習の目的を論ず(其の一)。柔道, 1(2): 2-3.
- 嘉納治五郎(1930b)道場に於ける形乱取練習の目的を論ず(其の二)。柔道, 1(3): 2-4.
- 嘉納治五郎(1930c)道場に於ける形乱取練習の目的を論ず(其の三)。柔道, 1(4): 2-5.
- 嘉納治五郎(1930d)道場に於ける形乱取練習の目的を論ず(其の四)。柔道, 1(5): 2-4.
- 嘉納治五郎(1930e)道場に於ける形乱取練習の目的を論ず(其の五)。柔道, 1(6): 2-4.
- 嘉納治五郎(1937)柔道の修行者は形の練習に今一層の力を用ひよ。柔道, 8(4): 2-4.
- 嘉納治五郎先生伝記編集会編(1964)嘉納治五郎。講道館。
- 桐生習作(2010)柔道「慰心法」の導入と嘉納治五郎の思想。武道学研究, 43(1): 27-38.
- 工藤龍太(2015a)合気道史における海軍大将竹下勇の覚書『乾』、『坤』(1930-1931年)の研究。スポーツ科学研究, 12: 145-169.
- 工藤龍太(2015b)近代武道・合気道の形成:「合気」の技術と思想。早稲田大学出版部。
- 工藤龍太・志々田文明(2010)合気道における合気の意味: 植芝盛平とその弟子たちの言説を中心に。体育学研究, 55(2): 453-469.
- 黒沢文貴(1998)第三章 軍令部次長から予備役編入まで。波多野勝ほか編, 海軍の外交官竹下勇日記。芙蓉書房出版, pp.53-73.
- 源了圓(1989)型。創文社。

- 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房.
- 本村清人 (2007) 学校武道の歴史. 日本武道館編, 日本の武道. 日本武道館, pp. 54-57.
- 永木耕介 (2008a) 嘉納柔道思想の継承と変容. 風間書房.
- 永木耕介 (2008b) 嘉納治五郎が求めた「武術としての柔道」: 柔術としての連続性と海外普及. スポーツ人類学研究, 10・11: 1-17.
- 中嶋哲也 (2011) 日中戦争期における講道館柔道への理念批判: 日本精神を主張した藤生安太郎を中心に. スポーツ史研究, 24: 27-40.
- 中嶋哲也 (2013) 高専柔道大会の成立過程: 競争意識の台頭と試合審判規定の形成過程に着目して. 体育学研究, 58(1): 257-276.
- 中嶋哲也 (2014) 四帝大会成立過程における「柔道のスポーツ化」論の出現とその歴史的意味: 1918-1928年における学生柔道と講道館の関係に着目して. 体育学研究, 59(2): 721-744.
- 中村民雄 (1994) 体錬科武道と戦技武道. 中村民雄著, 剣道事典: 技術と文化の歴史. 島津書房, pp. 247-258.
- 日本武道協議会 (2014) 武道の定義. <http://www.nipponbudokan.or.jp/shinkoujigyuu/teigi>, (参照日 2016年 6月15日)
- 岡部平太 (1960) コーチ50年. 大修館書店.
- 佐藤忠之・志々田文明 (2008) 富木謙治の合気道: 基本から乱取りへ. BAB ジャパン.
- 志々田文明 (1979) 嘉納治五郎の柔道観とその展開. 筑波大学体育研究科修士論文.
- 志々田文明 (1992) 「海軍大将竹下勇・武術日記」と大正15年前後の植芝盛平: 合気道の形成過程の研究 (1). 武道学研究, 25(2): 1-12.
- 志々田文明 (2001) 合気道競技史の研究: 合気乱取り法の創案過程を中心に. 早稲田大学体育学研究紀要, 33: 17-27.
- Shishida, F. (2010) Judo's techniques performed from a distance: The origin of Jigoro Kano's concept and its actualization by Kenji Tomiki. Archives of Budo, 6(4): 165-172.
- Shishida, F. (2011) Jigoro Kano's pursuit of ideal judo and its succession: Judo's techniques performed from a distance. "IDO MOVEMENT FOR CULTURE. Journal of Martial Arts Anthropology", 11(1): 42-48.
- Shishida, F. (2012) A Judo that incorporates Kendo: Jigoro Kano's ideas and their theoretical development. Archives of Budo, 8(4): 225-233.
- 志々田文明・成山哲郎 (1987) 合気道教室 (第4版). 大修館書店.
- 寒川恒夫 (1994) 「柔道一斑並びに其の教育上の価値」講演にみる嘉納治五郎の柔道体系論. 講道館柔道科学研究会紀要, 7: 1-10.
- 柞木田龍善 (1979) 介山の武術論. 柞木田龍善著, 中里介山と武術 (下). 体育とスポーツ出版社, pp. 199-211.
- 富木謙治 (1937) 合気武術教程 (自刊).
- 富木謙治 (1938a) 柔道の将来と合気武道. 柔道, 9(4): 16-20.
- 富木謙治 (1938b) 合気武道 (二). 柔道, 9(5): 16-19.
- 富木謙治 (1938c) 合気武道 (三). 柔道, 9(8): 10-12.
- 富木謙治 (1938d) 合気武道 (四). 柔道, 9(9): 10-12.
- 富木謙治 (1938e) 合気武道 (五). 柔道, 9(10): 9-11.
- 富木謙治 (1942a) 柔道に於ける離隔態勢の技の体系的な研究: 柔道原理と合気武道の技法. 建国大学研究院.
- 富木謙治 (1942b) 日本武道の真髓. 武道公論, 12: 1-8.
- 富木謙治 (1943a) 体術教程. 陸軍憲兵学校.
- 富木謙治 (1943b) 日本武道の美と力. 建国大学研究院研究期報, 5: 165-225.
- 富木謙治著・志々田文明編・解説 (1991) 武道論. 大修館書店.
- 植芝吉祥丸 (1995) 合気道一路: 戦後合気道発展への風と雲. 出版芸術社.
- 渡辺一郎編 (1987a) 武道論演習資料Ⅳ.
- 渡辺一郎編 (1987b) 武道論演習資料Ⅴ.
- 渡辺一郎編 (1987c) 武道論演習資料Ⅵ.
- 渡辺一郎編 (1987d) 武道論演習資料Ⅶ.

(2016年 2月23日受付)
(2016年 9月29日受理)